

| | |
|---------------|---|
| Title | 〈フレイ神ゴジ〉フラウンケルのサガ(改訳・その1) |
| Author(s) | 菅原, 邦城 |
| Citation | 大阪外国語大学学報. 73 p.53-p.67 |
| Issue Date | 1987-03-25 |
| oaire:version | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/81140 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈フレイ神ゴジ〉 フラウンケルのサガ
(改訳・その1)

菅 原 邦 城

Hrafnkels saga Freysgoða (1)

A revised translation from the Old Icelandic

by Kunishiro Sugawara

To the memory of the late Professor Jón Helgason (1899—1986)

Translator's preface:

This is actually my second translation of *Hrafnkels saga Freysgoða*, one of the most famous short sagas from thirteenth-century Iceland. The first one appeared in our Journal Nos. 21 and 22, March 1969 and February 1970, respectively. It was, however, a kind of an apprentice's trial, and now, after having read the saga again and again since then, I am ready to admit that my first translation was blemished with a few words misinterpreted and with several sentences carelessly left not translated into Japanese. This time an improved and, to my mind, more readable Japanese translation is produced here without any special annotation, for which I allow myself to refer the Japanese reader to the above-mentioned translation of mine. Those words and explanations which are enclosed with brackets do not have their equivalents in the Icelandic original, but are added only to help the reader to understand better the contexts.

The edition used for this translation is the same one as for the former translation, i. e. *Hrafnkels saga Freysgoða* edited by Jón Helgason, 3rd ed., Copenhagen 1964. Those editions included in the Icelandic classic series *Íslensk fornrit* (Vol. XI, Reykjavík 1950) and in E. V. Gordon's *An Introduction to Old Norse*, 2nd edition revised by A. R. Taylor (Oxford 1974) were also consulted where it seemed necessary to do so. So was the English translation done by Hermann Pálsson, *Hrafnkel's Saga and Other Icelandic Stories* (Penguin Books 1971). The second and last part of my present translation will appear in the next number of this Journal.

(Osaka, November 3, 1986)

ここにフラヴンケルのサガは始まる

1

ハッルフrezという男が自分の船でアイスランドのブレイズダルにやってきたのは、(ノルウェーの)〈美髪〉のハラルド王の時代であった。王の父は〈黒〉のハールヴダン、その父は〈狩り王〉グズレズ、その父は〈金に気前よく食卓で物惜しみ〉のハールダウン、その父は〈尻〉のエイステイン、その父はスヴィーア人の王〈木伐り〉のオーラヴである。ハッルフレイズが移った所はフリョーツダル地区^{ヘラズ}の下手であった。船には妻と、フラヴンケルという名の息子が一緒だった。息子は当時15歳で、前途有望で有能な若者だった。

ハッルフrezは農場を始めた。冬の間に、アルンスルーズという外国人の女奴隷が死に、このため農場はそれ以来アルンスルーズ^{スカジル}屋敷と呼ばれている。春になるとハッルフrezは住居を(ブレイズダル)荒野^{ヘイズ}の北方に移して、そこでゲイトダル(「牝山羊谷」の意)と呼ばれている農場を始めた。

そしてある夜のこと、彼は1人の男が自分のもとに現われて、次のように語る夢を見た。「ハッルフrezよ、おまえは用心らしい用心もせずにそこで寝ているが、おまえの住居を移してラガルフリョート(河)の西へ行け。あそこにこそ、おまえの幸運という幸運がすべてあるのだから。」

このあとハッルフrezは目を覚まし、住居をラング河の向こうのトゥンガに移し、そこはそれ以来ハッルフrez屋敷と呼ばれている。そこに彼は老齢になるまで住んだ。ところで、彼は前の屋敷にたまたま^{ゴルト}牡豚(異読「牝山羊」^{ゲイ・ト})と牡山羊を残してきた。そしてハッルフrezが引越した当日、地滑りが起きて、屋敷の建物を潰し、この家畜は死んでしまった。このためにそこは、それ以来ゲイトダルと呼ばれているのだ。

2

フラヴンケルは、夏には馬で荒野を越えてゆくことを慣らわしにしていた。そのころヨクルスダル(「氷河の谷」)は(石)橋まですっかり人が入っていた。フラヴンケルは馬でフリョーツダル荒野を上がっていき、ある所で、(まだ)人の入っていない谷がヨクルスダルから枝分かれしているのを発見した。この谷は、フラヴンケルがそれまで見たことがある他の谷よりも住むのに適していると、彼には思えた。

そして帰宅するとフラヴンケルは父親に財産を分けてくれるように頼んで、自分は自分だけの住居を建てたいのと言った。父親はこれを息子に許し、彼はその谷に自分の屋敷をつくって、アザルボール(「御館」)と名づけた。フラヴンケルは、ラックサールダル(「鮭川谷」)のスキョルドー

ルヴの娘オッドビョルグを妻にした。彼らには息子が2人あった。兄はソーリル、弟はアースビョルンといった。

フラヴンケルはアザルボールに住まいを定めると（異教の神々に）さかんに犠牲を捧げた。フラヴンケルは大きな神所^{ホヅ}を建てさせた。彼はどの神よりもフレイ神を好み、これに、所有する最も貴重な品々を自分と折半にして捧げた。フラヴンケルはその谷全体に人を住まわせて人々に土地を分け与えたが、しかしながら彼らの首領となることを欲して、彼らを従えるゴジの地位をわが物にした。これによって彼の名は長くされて、〈フレイ神ゴジ〉と呼ばれた。彼は横暴きわまる男だったが、才芸に恵まれてもいた。彼はヨクルスダル住民を無理やり自分に服従させてシングマンとした。自分の家人には親切で思いやりがあったが、（彼に従わない？）ヨクルスダル住民に対しては厳しく思いやりがなかった。フラヴンケルはしばしば決闘をしたが、補償は誰にも支払わなかった。そのために、彼が何をしようとも、彼からどんな償いでもとった者は1人もいなかった。

フリョーツダル荒野は越えるのが容易でなく、石だらけの湿原であったが、それでもハッフレズとフラヴンケルは、父子仲がよかったのでよく相手を訪ねた。その道をハッフレズは厄介に思っ
て、フリョーツダル荒野に立っている丘陵を越える道を探した。そこにもっと乾いた、そしてもっと長い道を見つけ、これは〈ハッフレズ道〉と呼ばれている。この道は、フリョーツダル荒野をよくよく知っている者たちしか通れないものだ。

3

ビャルニという男がいたが、彼はラウガルフース（「温泉の家」）という農場に住んでいた。これはフラヴンケル谷にある。ビャルニは結婚していて、妻との間に息子が2人いた。その1人はサーム、もう1人はエイヴィンドといって、二人とも美男で末頼しい男だった。エイヴィンドは家にいて父親と一緒にだったが、サームの方は結婚していて谷の北側のレイクスカーラルという農場に住み、財産家だった。サームは極めて傲慢ながら法律に詳しい人物だった。エイヴィンドの方は通商人となってノルウェーに渡って、冬の間そこに滞在した。ノルウェーから諸国に赴いてミクリガルズ（「大都」、コンスタンティノーブル）に逗留し、ここでギリシア王（ビザンティン皇帝）から大いに榮譽を受けながらしばらく滞在した。

フラヴンケルは財産の中に、他のものよりも優れていると思われる宝物を所有していた。これは種馬で、色は褐色がかったねずみ色をして、背中に黒い線が1本走っていた。これを彼は、わがフレイファクシ（「フレイのたてがみ、フレイの駒」）と呼んでいた。彼は友なるフレイにこの馬を半分捧げていた。この馬にフラヴンケルは非常な愛情を抱いていて、彼の意志に反してこの馬に乗った者は必ず殺すという誓いを立てていた程だった。

ソルビョルンという男がいた。彼はビャルニの弟で、フラヴンケル谷のホールという農場に住んでいた。これは（川の）東側にあって、アザルボールと向かいあっていた。ソルビョルンは財産は少なかったが、子供は多かった。彼の息子で一番年長のはエイナルといった。これは背丈があり、仕事をよく仕込まれていた。

ある春のこと、ソルビョルンがエイナルにどこか奉公先を探してはどうかと言った。「というのは、わしはここにいる子供たちがする以上の手助けは要らんのだし、おまえは仕事をよく仕込まれているから奉公先はいっぱいあるはずだ。今おまえを手離すのは、可愛くないからではない。なにしろ、おまえはわしにとって、子供たちの中で一番役に立つのだから。そうする原因は、むしろわしに財産がなくて貧乏なことだ。家の仕事は他の子たちがしてくれる。あの子たちよりもおまえの方によい奉公先はあるだろう」

エイナルが答える、「それを今言うなんて遅すぎるよ。なんせ、奉公先で一番いいのはもう（他の）みんなが取ってしまっているもの。おれ、残りかすをちょうだいするなんてのは嫌だ」

ある日エイナルは馬を出してアザルボールに出かけた。フラヴンケルは居間にいた。彼はエイナルにやさしく愛想のよい挨拶をした。

エイナルは、フラヴンケルに奉公させてもらえませんかと頼んだ。

彼は答えた、「どうしてこんなに遅く頼むのだ？おまえだったら真先に雇ってたろうに。今はもう奉公人はみんな雇ってしまっている。たった1つ、多分おまえがしたいとは思わぬ仕事を除いての話だが」

それはどんな仕事ですかと、エイナルが訊ねた。

フラヴンケルは、自分はまだ羊番の男を雇っていないのだと答えて、それは大いに必要だとも言った。

エイナルは、自分は何の仕事をするか、何だかんだとは気にかけませんと答えた。しかし、1年の間食わせてもらいたいのですと付け加えた。

「では今すぐこっちの条件を話そう」とフラヴンケルが言った。「おまえは山小屋で50頭の羊を囲いの中に追入れ、夏の分の薪をみんな集めてくるのだ。この仕事をおまえは1年間の住み込み分としてするのだ。ところでおまえに、他の羊番たちと同様に1つの条件をつけたい。フレイファクシがあれの群れを連れて谷の上手で草を食っているが、あれには冬も夏もよく気をつけることだ。おまえに一つ警告しておく。たとえどんなに大変な必要が迫っていてもフレイファクシには絶対乗ってほしくない。それと言うのも、わしはこのことで、あの馬に乗った者は殺すということを強く誓っているからだ。フレイファクシには12頭の牝馬がついている。その中のどれでも、夜であれ昼であれ、おまえは使いたいのを勝手に使っていい。わしが話したようにしなさい。他人に警告した者には責めはない、とは昔からの諺だ。これでおまえは、わしがどんな誓いをしているか分かつ

たな」

エイナルは、他の馬が沢山いるならば、自分に禁じられた馬にわざわざ乗るほど自分は根性曲がりではないと思います、と答えた。

5

エイナルは衣類をとり、わが家に帰り、それからアザルボールに戻った。その後、フラヴンケル谷の上手にある山の放牧場、グリョートテグ（「石牧草地」）セルと呼ばれた所へ羊が移された。夏の間エイナルにとって仕事はしごく順調に進み、真夏に至るまで羊が見えなくなることは一度としてなかった。ところが、真夏になってある夜のこと、30頭ばかりの羊がいなくなってしまった。エイナルは牧草地を隅から隅まで捜したが見つけれない。こうして約1週間、羊はいなくなったままだった。

ある朝のこと、エイナルは早く外に出ていった。その頃には南よりの霧がすっかり晴れ、小糠雨も上がっていた。エイナルは棒と馬勒と鞍敷きを手にとり、グリョートテグ川を歩いて渡った。この川は放牧場の前を流れている。ところが川の砂州には、前の晩囲いの中にいた羊たちがうずくまっていた。この群れをエイナルは放牧場に追っていき、それから前にいなくなっていたあの群れを捜し始めた。この時、砂州の先の方に馬の一群が見え、エイナルはどれか馬をつかまえて乗ろうと考えた。馬に乗れば確かに歩くよりも速く進めるだろうと思ったわけだ。そして馬たちの所に来るとそれを追いかけた。ところが、人を乗せてあるくのに全然慣れていなかった馬たちは怖じ気づいた。フレイファクシだけは別だったが、これはまるで地中に埋められてしまったかのように大人しくしていた。

エイナルは朝の時間が経っていくのが分かって、自分がこの馬に乗ってもフラヴンケルには分からないだろうと考える。こうして彼はその馬をつかまえて、これに馬勒をつけ、その背中に鞍敷きを置いて乗った。そしてグリョータールギル（溪谷）沿いに上がっていき、氷河まで達し、そしてヨクル（「氷河」）川が氷河の下に入る地点でこれに沿って西に向かい、それから川沿いに下がり、レイキャセルにやってきた。エイナルは放牧場にいる羊飼いたち全員に、誰かあの羊の群れを見た人はいないかと尋ねたが、自分が見たと答える者は1人もいなかった。

エイナルは明け方から夕方までフレイファクシに乗りづめだった。馬は足速に、そして遠方まで彼を運んだ。これは立派な馬だったのだ。エイナルは、あの群れは見つけられないものの、残っている羊をまず囲いに追い込む時分になったことを思いついた。そこで彼は東に向かって山の背を越えてフラヴンケル谷へ下っていたが、グリョートテグに下ってきた時、以前に通っていた溪谷の上手で羊の鳴く声が聞こえるのだった。彼はそちらへと向きを変え、30頭の羊が自分の方に走ってくるのを目にする。それは、もう1週間も見えなくなっていた例の群れで、彼はこれを他の羊といっしょに囲いまで追って帰った。

フレイファクシは全身汗みづくになり、汗は毛1本1本から滴り落ちた。また泥にまみれており、そしてすっかり疲れきっていた。馬は12回ほど転がりまわってから、大きな嘶きをあげた。その後、ものすごい勢いで道を下り始める。エイナルは馬のあとを追いかけて、馬に追いついて捕まえて、牝馬たちのところに戻そうと思った。しかし馬は非常におびえていて、エイナルはとても近づけなかった。

馬は谷を走り下りていき、途中止まらずにアザルボールにやってくる。その時フラウンケルは食卓についていた。そして馬は戸口にやってくると、大きく嘶いた。フラウンケルは、給仕をしていた女に戸口に行ってみろと言いつけた。「馬が嘶いたぞ。フレイファクシの嘶きみたいだった」

女は戸口に出ていき、フレイファクシがひどく汚れているのを見る。女はフラウンケルに、フレイファクシが戸口の外に来ていてひどく汚なくなっていますと告げた。

「秘蔵っ子は屋敷に帰ってきて一体どうしようというのか」とフラウンケルが言う。「何やらいいことではなさそうだな」

それから彼は出ていってフレイファクシを見、これに話しかけた。「養い子よ、おまえがこんな仕打ちを受けたとは面白くない。だが、おまえがわしに話したからには、おまえは分別をなくさなかったというもんだ。この復讐はきくと取ってやる。さあ、おまえの群れに戻れ」

フレイファクシはすぐに谷を上がって自分の牝馬たちのところに戻った。

6

フラウンケルはその晩は床に入って夜通しぐっすり寝た。そして翌朝、馬を出して鞍をつけさせて、放牧場へと上がっていった。黒っぽい服装をしていた。手に斧を持っていたが、武器はそれだけだった。その頃エイナルは羊を囲いの中に追い込んだばかりだった。そして囲いの柵によりかかって羊の数をかぞえていた。女たちは乳を搾っていた。

奉公人たちはフラウンケルに挨拶をした。彼はどんな具合だと尋ねた。

エイナルが答える、「おれはとんだ目に遭ってしまって。なにせ30頭の羊が1週間ほど見えなくなってしまったんです。でも、もう見つかっています」

フラウンケルは、自分はそんなことは責めないがと言った。「しかし、もっと具合の悪いことは起こらなかったか。羊が見えなくなることは、予想以上に度々あったわけでもない。ところで、おまえは昨日フレイファクシに乗ったのではないか」

それは違うなんて言えませんが、エイナルは答えた。

フラウンケルが応じる、「おまえに許されている馬が他に沢山いたのに、一体どうしておまえに禁じられていたあの馬に乗ったのだ。わしがあも堅く誓っていなかったならば、たった一回の罪をおまえに許してやったろう。なにしろおまえは素直に白状しているからな」

しかし、厳粛な誓いを破ってわが身に呪いを招く人間には確なことは起こらないという信念から、

フラヴンケルは馬からエイナルの前にとび降りてこれに死の一撃を浴びせた。

その場はこのようにしたまま、フラヴンケルはそのあとアザルボールに帰宅して、その出来事を語った。それから別の男を放牧場の羊のところに行かせる。エイナル（の死体）の方は放牧場の西の小山に運ばせ、墓にケルン（石塚）を築いた。これはエイナル・ケルンと呼ばれており、（グリーオー・トテグ）放牧場からはそこ（に太陽がかかるの）をしるしにして、夕方の6時だと考えられている。

7

ソルビョルンはホールでわが子エイナル殺害の知らせをきき、この出来事を非常に悲しんだ。それでも馬を出して、アザルボールへ行き、フラヴンケルにわが子殺害の償いを求める。

フラヴンケルは、自分は今度の1人ばかりか他にも人を殺していると答えた。「わしがどんな人間にも補償を払うつもりのないのをおまえだって知らぬことはあるまい。それでもみんなは、ことがそう処理されるのを我慢せざるを得んだ。だがな、そうは言うものの、今度わしがやったことはこれまでしてきた人殺しの中では相当によくないものだと思う。おまえは長らくわしの隣人だったし、わしもおまえのことは十分に気にいってもいたし。これはおたがいさまだが。エイナルがあの馬に乗りさえしなかったら、二人の間にはとるに足らぬことしか起こらなかったろう。しかし、わたしたちはよく、口数の多いことを悔やむことになるものだ。余計しゃべるよりも少なくしゃべって、これを悔やむことは稀だろう。今度わしのしたことがこれまでした他のことよりもよくないと、わしが思っている証拠を見せようじゃないか。私はおまえの一家に、夏は家畜の乳を、秋はつぶしたばかり（の家畜）の肉をやる。これは、おまえが自分の屋敷に住んでいたい間は毎年やろう。わしが面倒をみて、おまえと二人でおまえの息子や娘たちに仕事を見つけてやり、その子らを助けてやってそれでいい結婚ができるようにする。わしが所有しているとおまえが知っているもので、今後おまえが要るものは何でも、わしに知らせてくれ。そうすれば今後おまえは自分が要るものについて事欠くことはない。おまえは好きなうちは自分の屋敷に住んだらいい。しかしそれに飽きたらここにやって来い。そうしたら、わしが最期の日まで世話しよう。こういうことで和解しようじゃないか。あの男は高くついたと言う人間が多いと思うぞ」

「この提案は受けたくありません」とソルビョルンは言う。

「なら、どんな提案を受けたいのだ」とフラヴンケルは言った。

ソルビョルンは言う、「わしは、あんたとの間に他の人たちを立てたらいと思います」

フラヴンケルは答える、「つまり、おまえは自分がわしと対等だと思うわけだな。ならば、わたしたちはそんな和解のしかたはできんぞ」

このあとソルビョルンはアザルボールを立ち去って地区を通っていった。彼はラウガルフースにやって来て兄のビャルニに会い、この出来事を話して、この件で裁判に関わってくれないかと頼む。

ビャルニは、今の立場のフラウンケルを相手に争えるくらい自分は彼と対等ではないと答えた。「わたたちが大金を持っているにしても、フラウンケルを相手に争うなんてできない。己れを知る者は賢い、というもっともな諺もあるしな。あの男は裁判で、わしらよりも力のある連中をたくさん窮地に陥れてきた。そんなに好い提案を拒んだとは、おまえは分別がなかったというものだ。わしはこの問題には関わりたくない」

それを聞くとソルビョルンは、兄に手厳しいことばを浴びせ、ことが危なくなればなるだけ一層兄の勇氣は挫けていくと言った。そうして立ち去り、こうして兄弟は不仲になったまま別れるのだった。

ソルビョルンは途中休みもせずレイクスカーラルへと下ってきて、戸を叩いた。戸口に人が出てきた。ソルビョルンはサームに出てきてもらいたいと言う。サームは叔父にいてねいな挨拶をして、泊まるように言った。これにソルビョルンは全く冷やかに応じた。

サームはソルビョルンが気落ちしているのに気づいて消息を尋ねると、彼はわが子エイナル殺害のことを告げた。

「大した事件じゃありませんね」とサームが言う。「フラウンケルが人を殺したって」

ソルビョルンは、サームは自分に援助をしてくれるだろうかと尋ねた。「なにせこの事件は、被害者はわしの最近親者ではあるんだが、敵の一撃はあんたにも遠くはないという風になっているから」

「あんたはもしかするとフラウンケルに補償を求めたんですか」

ソルビョルンは、自分とフラウンケルの間がどういう風になったのか、ありのまま話した。

「これまで聞いたことはありませんよ」とサームは言う。「フラウンケルがあんたのような人にそんな申し出をしたなんてことは。じゃ、叔父さんと一緒にアザルボールに行きますよ。二人してフラウンケルに下で出て、その申し出をまだ守る気なのか見てみましょう。どっちみっち彼はよくするでしょうよ」

「今はもう」とソルビョルンは言った。「フラウンケルにはその気はないし、わしの方にしてもあいつの所を去ってからはそれは考えていない」

サームは言う、「裁判でフラウンケルと争うことは難しいと思いますよ」

ソルビョルンは答える、「おまえら若い者の目には何事も大きく見えてしまうので、出世は覚束ないのだ。身内というものにわしと同じ位ひどく浅ましい連中を持っている人間はいないと思うよ。おまえのような男たちには確なことがないだろうよ。おまえは自分が法律に詳しいと思っていて、つまらない裁判にはよく首を突っ込むが、どう見たって急を要するこの問題は引き受けたがらない。当然ながら、それでおまえは非難されるだろう。なにせ、おまえはわしら一族の中で一番のうぬぼれ屋だからな。成行きがどんな結末になるか見えるようだよ」

サームは答える、「この訴訟を引き受けて、叔父さん共々恥をかくだけだったら、一体あんたは以前よりもどれだけの利益を得られるというのですか」

ソルビョルンは答える、「あんたが訴訟を引き受けるということが、わしにとっては大きな慰めなのだよ。それがどんな結果になるにしてもな」

サームは答える、「本意ではありませんがこの件は引き受けましょう。そうするのは、叔父さんとの親類関係のためだけです。承知してほしいけれど、叔父さんのような馬鹿を助けるとわしは思っているのです」

そうしてサームは手を差し出して、ソルビョルンから訴訟を引き継いだ。

8

サームは馬を連れてこさせ、それに乗って谷に上がっていき、ある農場に行つてエイナル殺害を公けにし、フラヴンケルに対抗すべく支持者を得るのだった。フラヴンケルはこれを聞き、サームが自分に対する訴訟を引き受けたとは笑止千万だと思った。

こうして(夏が、そうして)冬が過ぎていき、春になって召喚日となった時、サームはアザルボールに上がっていき、フラヴンケルをエイナル殺害で(集会に)召喚する。その後サームは谷を通っていき、隣人たちに集会参加を求めた。そして人々が集会参加の準備ができるまで、自宅で静かにしているのだった。

フラヴンケルの方は部下を谷中に遣って、手勢を集めた。彼は70名のシングマンを連れていく。この一団を伴って彼は東のフリョーツダル荒野を越え、それから湖の上手を廻り、尾根を横断してスクリズダル(谷)に至り、谷に沿って上がっていき、南のエックス荒野を越えて、ベルフィヨルド(湾)に至るが、ここからはシーザ(南部沿岸地方)まで大集会会場に直接続く道がある。フリョーツダルから南下してシングヴォール(「集会広原」)までは17日の行程である。

フラヴンケルが地区を発っていったあと、サームは自分のもとに手勢を集める。彼が同行させることができた者の大部分は、^{エインフレイビング}独身者と、彼が以前に召集をかけておいた隣人たちだった。サームはこれらの仲間に武器と衣服と食物を与えた。彼は(フラヴンケルとは)違う道を通って谷を出た。北の橋までいき、それから橋を渡り、そこからモズルダル(「茜ヶ谷」)荒野を越え、夜はモズルダルに泊まった。そこから一行はヘルジブレイズ^{トウング}舌形地に達し、それからブラーフィヨール(山)を越え、そこからクロークスダル(谷)に入り、南のサンド(中南部の荒地)に出、サンダフェッル(山)に下ってきて、そこからシングヴォールに到着した。そこに、フラヴンケルは未だ着いていなかった。彼はサームよりも遠廻りをしたので、時間がかかっていたのだ。

サームは自分の手勢のために小屋に^{フーズ}天幕をかけたが、それは東部地方の住民がいつも天幕をかける場所から離れていた。フラヴンケルは少し経ってから集会の場にやっきてた。彼はいつものように自分の小屋に天幕をかける。そしてサームが集会に来ていることを聞いた。笑止千万だ、と彼は思った。

この集会は非常に出席者が多くて、アイスランドにいた首領たちの大多数がきていた。サームは

首領たちに1人残らず会い、支持と援助を依頼したが、みんなの返答は同じだった。つまり、自分はフラヴンケル・ゴジと争って自分の名誉を危うくしようというほどサームとは親しくないと答え、フラヴンケルと集会で争った者の大多数は同じ目に遭っている、つまりフラヴンケルは全員に、自分に対して起こした訴訟を放棄させていると語るのだった。

サームは自分の小屋に戻っていく。彼と叔父はがっかりしてしまい、自分たちの訴訟は恥と不名誉を得るだけに終わるのではないかと懸念した。叔父と甥は非常に心配で寝ることも食べることもできなかった。首領の皆が皆、二人が自分たちに援助をしてくれるのではないかと期待していた首領も含めて全員が、この二人に援助を拒んだからだ。

9

ある朝はやく、ソルビョルン老人が目を覚ました。彼はサームに目を覚まさせて、起きてくれと言った——「わしは眠れないんだ」

サームは起きて、服を着る。二人は外に出てエックス川に下りていき、橋の下までいく。そこで二人は顔を洗う。

ソルビョルンがサームに言った、「わしが一番いいと思うのは、あんたがわしらの馬を連れてこさせて家に帰る仕度をする事だ。今となっては、わしらには不名誉しか予想できないからだよ」

サームは答える、「そうだろうとも。なんせあんたは、フラヴンケルと争うことしか望まなかったし、自分の身内の補償を要求する権利のある人なら大方がよこんで受け入れた申し出を承知しようともしなかったんだからな。そして、わしらや、この訴訟であんたの味方をしたくないと思った人たちみんなをなじった。だがわしは、自分が何かやれるという望みが尽きるまで諦めないぞ」

するとソルビョルンはこれに感激して涙を流すのだった。

その時、川の西、二人が腰かけていた所より少し下手に、5人の男が一緒にある小屋から出てくるところを見る。先頭を歩いている男は背は高いが、体格はがっちりしていなかった。男は木の葉緑の外套を着、手には飾りを施した剣を持っていた。整った赤ら顔の風采の上がった男で、髪は薄栗毛色で豊かだった。その男は頭の左側に捲毛があったので容易に見分けられた。

サームが言った、「さあ、立って川の西側に行って、あの男たちに会おう」

二人はそれから川にそって下がっていく。先頭を歩いていた男が先に二人に挨拶して、誰だと尋ねる。

二人は名乗った。

サームがこの男に名前を尋ねると、相手はソルケルと名乗って、ショースタルの息子だと答えた。

サームは、彼がどここの出身で、またどこに家があるのか尋ねた。

相手は、自分は家系と生まれは西部地方の者であり、家はソルスカフィヨルドにあると答えた。

サームは言った、「あなたはゴジですか」

とんでもない、と相手は答えた。

「では、自由農民ですか」とサームが言った。

ちがう、と相手は返事した。

サームは言った、「それでは、あなたはどんな人なのですか」

相手は答える、「わしは独身者だ。アイスランドにはこの前の冬に帰ってきた。7年の間外国にいてミクリガルズへ行き、ギリシア王の家臣になった。今は兄のもとに居るが、兄はソルゲイルという」

「その方はゴジですか」とサームが言う。

ソルケルは答える、「いかにもソルスカフィヨルド、それからヴェストフィルジルの一部のゴジだ」

「この集会に来ておられますか」とサームが言う。

「ああ、来ているとも」

「手勢はどれだけ持っておられますか」

「70人いる」とソルケルは言う。

「あなたたちは、もっと兄弟がおありですか」とサームは言う。

「三人目がいる」とソルケルは言った。

「それはどなたですか」とサームは言う。

「ソルモーズという」とソルケルは言う。「アールフタネス（「白鳥岬」）のガルザルに住んでいて、ボルグのソーロールヴ・スカッラ＝グリーンズソンの娘ソールディースを妻にしている」

「あなたに私らを援助してもらえないでしょうか」

「おふたりは何を必要としているのかね」とソルケルは言う。

「首領たちの援助と力です」とサームは言う。「私ら二人はエイナル・ソルビャルナルソン殺害の件でフラヴンケル・ゴジを相手に争う訴訟をかかえているのですが、あなたの援助があれば私らの手続きに期待がもてるというものです」

ソルケルは答える、「前にいったように、わしはゴジではないのだ」

「他のご兄弟と同じように首領の息子さんなのに、どうしてあなたはそういう風に相続から外されているのですか」

ソルケルは言った、「相続権を持っていなかったとは言っていないぞ。そうではなく、外国に出かける前にわしのゴジ権を兄のソルゲイルに譲ったのだ。それ以来返してもらっていない。それは、兄が持っている限り安全だと思うからだ。二人で兄に会いに行って、助けを求めなさい。勇ましく気高い立派な男で、何事にも能力があり、また若くて功名心にはやる人だ。こんな男たちが一番、おまえたちに援助を与える見込みがあろうってもんだ」

サームは言う、「あなたが一緒に頼んで下さらないと、私らは兄さんから何もしてもらえないでしょう」

ソルケルは言う、「二人に反対するよりも味方することを約束しよう。というのも、近親者を殺

されたために訴訟を起こすのはいうまでもなく急を要することだと思うからな。さあ、二人は兄の小屋に行って中に入るんだ。みんなは寝ている。小屋の奥に吊り床が二つあるのがみえるだろう。その一つからはわしが起きてきたが、もう一つには兄のソルゲイルが休んでいる。兄は集会に来てからずっと足に大きな根太ができていたのだ。それで夜にあんまり眠っていなかったが、ゆうべ根太が破れて根がとれた。その後はずっと眠っている。足に熱が出ているので足を夜具から踏み台の上に突き出している。老人が先に小屋に入って奥に行け。眼も弱く、齢でも老いぼれているように見えるからな、あんたは」とソルケルは言う。「兄の吊り床に行ったら、太仰につまづいて、踏み台の上に倒れろ。そして包帯している足指をつかんで、ぐいっとひっぱれ。そして兄がどんな反応をするか見るんだ」

サームは言った、「私らによかれと思って言って下さるんですが、これはとても得策だとは思えませんね」

ソルケルは答える、「わしの言ったことをするか、わしに助言を求めないか、この二つの一つをおまえたちはしなければいけない」

サームは言った、「この人が助言しているようにした方がいいだろう」

ソルケルは、自分は彼らよりも後に行くと言った。「わしは部下を待っているのぞな」

10

さて、サームとソルビョルンは出かけて、小屋に入っていく。そこでは男たちがみんな眠っていた。二人はすぐ、どこにソルゲイルが寝ているか分かる。ソルビョルン老人が先に行って、ひどくつまづいた。そして吊り床まで行ったとき踏み台の上に倒れ、根太にかかっていた足指を握って、ぐいっとひっぱった。それでソルゲイルは目を覚まし、吊り床の中で飛び上がって尋ねた——いままで病気だった人間の足を踏みつける不器用なやつは誰だ、と。

サームたちは一言も発することができなかった。

その時、ソルケルが急いで小屋に入ってきて、兄のソルゲイルに言った。「兄さん、このことでそんなに怒ったり興奮したりしなさんな。あんたを傷つけるものは何もありませんから。自分で望む以上に悪くなってしまうということは多くの人にありますよ。ひどく気が重い場合にはなおさら、あらゆることに気をつけることはできないでしょう。たしかに兄さん、重い病いにかかっているあんたの足が痛むのはもっともなことです。それは誰よりも一番よく兄さんが自分の身に感じているでしょう。しかし、この老人にとって息子が殺されたうゑ補償もとれず、自分自身は何にでもこと欠くというのも、兄さんに劣らずつらいことでしょう。それは老人が一番よく自分の身に感じているでしょう。非常に気がかりなことをかかえている人間があらゆることに十分気をつけられないというのは十分考えられますよ」

ソルゲイルは言う、「そのことでわしを責められるとは思わないな。老人の息子をわしが殺した

わけではないから。だから老人はその復讐をわしにはできない」

「何もその復讐を兄さんにやろうと思ったのではないですよ」とソルケルは言う。「ただ思ったよりも強く兄さんに当たってしまったのです。そうしたのが目が衰えたせいでもあるけれども、老人は兄さんの助けを頼みにしているのです。困っている年寄りを助けるのはいかにも男らしい行為です。老人は息子のために訴訟を起こしていますが、これは必要に迫られてのことで、欲得ずくではありません。ところが首領たちはみんな、この二人に援助を断って、非常な卑劣さを見せているのです」

ソルゲイルは言った、「この男たちは誰を相手に訴えをしているのだ」

ソルケルは答えた、「フラヴンケル・ゴジが正当な理由もなくソルビョルンの息子を殺したのです。あの男は次から次と悪行を重ねているのに、誰にもその補償をしようとしません」

ソルゲイルは言った、「わしも他の人たちと同じようになるだろう。わしはフラヴンケルと争うほどこの男たちに恩はない。わしは思うのだが、フラヴンケルは自分と争う者に対して毎夏同じようにして、争いの相手の大方は結局名誉らしいものはほとんど、あるいは全然得ずじまいだ。誰にだってそうなるのをわしは見ている。それだから大多数の者は、必要に迫られない限り、フラヴンケルとは争いたくないのだろう」

ソルケルは言う、「もし首領だったらわしも、フラヴンケルと争うのは得ではないと思うようになったかも知れない。だが、そうは思わない。それというのも、これまで誰もが迷惑している男を向こうに回すのは大いにいいことだと思うからだ。またフラヴンケルにいくらかでも勝つことは、わしやそうする首領の名誉を大いに高めると思う。しかし、わしも他の人たちと同じようになったとしても、名誉が小さくなるものでもない。多くの人に起こることがわしにだって起こるかもしれないのだから。虎穴にいらずんば虎兇を得ずだ」

「よく分かった」とソルゲイルは言う。「おまえがどんなにこの男たちを助けたいと思っているかな。だからおまえにわしのゴジの地位と権利を譲ろう。これまでわしが持っていたと同じ期間おまえが持て。そしてその後は二人で平等に分けよう。それまで、自分で助けたいと思う者たちを助ければいい」

「わしが思うに」とソルケルが言う。「兄さんがわたしたちのゴジの地位をできるだけ長く持っているのが一番いい。兄さんは兄弟みんなの中で多くのことについて一番通じているから、わしは誰よりも兄さんに持っていてもらいたい。ところが、わしの方は差し当たり、自分が一体なにをしたいのかさえ分からないのだ。でも兄さん、知っての通り、わしはアイスランドに帰って以来、大概のことに口出ししなかった。今わしは自分の助言がどんなものか、見ることができる。差し当たり言うべきことは言った。〈捲毛〉のソルケルは、自分のことばがもっと重ぜられる所へ行くかもしれないよ」

ソルゲイルは言う、「弟よ、どういう風になるか分かった。おまえは不機嫌になっているが、わしには耐えられないことだ。おまえが望むのならば、どんなことになろうとも、二人でこの男たち

を助けてやろう」

ソルケルは言った、「助けるのがいいと思っていることだけを頼んでいるのです」

「訴訟が成功するように」とソルゲイルは言う。「この男たちはどんなことができると考えているのだ」

「それは今日話したように、私らは首領たちから援助してもらわなければなりません、訴訟手続きは私が自分でやれます」（とサームが言った。）

そうならば彼を援助することは容易だと、ソルゲイルは言った。「訴訟の準備はできるだけ手落ちなくすることが肝腎だ。だがわしが思うに、ソルケルは裁判が開始される前におまえたち二人がじぶんに会いに来ればいいと考えている。そうすれば二人は、頑固さの報いとして幾分かの慰めを得るか、それとも以前よりもひどい恥辱、難儀や苦しみを得るか、この二つの一つになるだろう。さあ小屋に戻って陽気にしている。フラウンケルと争わなければならないのならば、しばらくは元気であることが必要だろうからな。しかし、わしと弟がおまえたちに援助を約束したことは誰にも言わないようにしろ」

それからサームとソルビョルンは自分の小屋に戻って、上機嫌だった。誰もかれもが、二人が出ていった時は塞ぎ込んでいたのにどうしてこうも急に気分をかえられたのかと、いぶかしがった。

11

彼らは裁判が開始するまで待っていた。開始するとサームは自分の手勢を召集して〈法の岩〉へ向かう。当時そこが裁判の会場であった。この時サームは、裁判の場に大胆に向かっていった。彼は直ちに証人を呼び挙げ、正当な国法にのっとり、訴訟上の手落ちもなく堂々とフラウンケル・ゴジに対する訴えを起こした。このあと、ショースタルの息子たちが味方の大群を従えて現われる。西部地方の住民は全員彼らを支持した。ショースタルの息子たちが人望のある人物であることは、明白だった。サームは法廷において、フラウンケルに抗弁をするように求めるところまで、訴訟を進めた。フラウンケル自身でなければ、正しい裁判手続きにのっとり彼のために抗弁しようとする者は、そうするように求められた。サームの訴えに対して大きな喝采がされた。誰も、フラウンケルのために弁明しようという者はいなかった。

フラウンケルの小屋に人々が走っていて、何が起きているか、彼に告げた。

彼は即刻行動を起こし、手勢を召集して裁判の場に向かった。そこでは大した抵抗もないだろうと考えていた。彼は、自分に対して訴えを起こすことを取るに足らん者どもに嫌うよう仕向けてきたのだ。サームのために開かれた法廷を解散させ、サームのやつには訴えを放棄させるつもりだった。ところが、今度ばかりはその機会がなかった。裁判の会場には、人が群がっていて、そのためにフラウンケルは近づけなかった。フラウンケルは力づくで押しやられ、彼を訴えている裁判を聞くことさえできなかった。したがって、自分のために抗弁することは彼には無理だった。

一方サームは、法の許す範囲内ぎりぎりまで裁判を進めて、ついにフラウンケルをこの集会で完全追放にした。

フラウンケルはすぐに小屋に戻っていき、自分の馬を連れてこさせ、集会の場を去る。以前には全く経験しなかったことなので、彼は今度の裁判の結末にひどく不満だった。このとき彼は東のリュングダル荒野に、それから東のシーザへ出て、途中休みもせずにフラウンケル谷に帰る。そしてアザルボールにいて、何事もなかったようにしていた。

一方サームは集会に残っていて、大いばりで歩き回っていた。

多くの人は、フラウンケルが大恥をかくことになったのを小気味よく思い、また彼が多数の人に不正を働いていたことを思い起こすのだった。

(未 完)